花江都
歌舞妓

年代記

五編

中

八

津田文庫
文庫1
1767
18

早稲田大学圖書館藏書

花江都歌舞妓年代記巻之九 中

談洲楼焉馬老人著

東都

享和二戌年

三月中村座ニ間口を廣げ花道新ニ建て。正月廿七日より初舞台ニ而

十郎松成ゆ三度ニて。附家八百義。ことけ經ゆ松助。國ニてゆ去代ニ年。西沢十内ゆ音八。

朝ひるよ鬼次。八ゝゝゆ沢村莫義。ぜんぢ坊よ栄ニてゆ。月さよ

中村大吉。大いその虎冨ニ年。せうくに去代ニ年。道成ち右傳のあゝ。ワキ傳そけ經ゆ

ゆそ杉ゆ。八百義附家ゆそけのせゆまり四人而能ゆる霞袖春山寺富本齊宮を更

ニ弦ゆ羽色里夕。此ところ後ゆ對面ニ。二ぢんめ狂言浦競艶姿町今神長五郎ゆ

去代ニゆ。ゆゆ去助よ莫義。弱ゝこの去吉ゆ栄ニて年。おとぢよ万能。よ代檜ゆ年

音八。めぢまやの娘とおちゆ二年冨ニ年。ゆゆ去ゆ八百義。八ゝゝ村のおそゆゆ大吉ゆ。

つだ文庫

010190605669

浄るり友呼聲塘燕富本節文字。三味せん湯髪のもせたるて松助。二階あてゑく。
富三郎。八百義。栄三郎。長吉あて打丸の平作大評判。跡き毎りがんを天満宮
九百年紀ゑ付 菅原 ゑと生と菅丞相。白太夫。源義三役者三郎。松王とかくだ
八百義。とるみと八重ゑ富三郎。ちよ菊と玉代ゑ大吉。さく福ちゑと玄蕃ゑ菊義。
てる國と時平松助。立田の姫と九郎代ちゑく。三月廿七日より 助六廓江戸櫻
浄るり 江戸半太夫 半五郎 喜三郎 三半十郎 半九郎 弦 江戸宮治郎 同 千治 同 秋治 あげ巻の助六八百義。
白酒奏者三郎。こうゑ盃あげ巻富三郎。揚の三郎久松助。ゑん魂ふ門三郎音八。
わさび屋せん平小次郎。けのせんちゑ玉代ちゑ。伊豆も大評判よ。四月十日より
 相妻裕小袖 半草菴薪水ゑ者三郎。天満屋徒三郎八百義。おあきゑ富三郎。馬閑
数ちゑゑ音八。ぐやゑ民万作。おあ〜奏評判の六助ゑ坂東者三郎。ろうの若侍三人ゑ

叶助。久七小次郎。おだくや十三郎ゑ松助。女ぐるまゑ玉代ちゑ。後ゑ 深谷手郷
けの敦ゑ栄三郎。八平次ゑ音八。宮ちゑに助ゑ郎。逸平と左門者三郎。家の井ゑ大吉
大ぐるく。切ゑ 姫小松 後宮者三郎。おちとゑ大吉。 高山権現 毛谷村六助と夜川
弥三郎ゑ八百義。おその玉代ちゑ。京極内匠ゑ音八。おきんゑ万作。木村茅刀夜川
弥三郎ゑ栄三郎。月二ぐん且 夏祭 さつ形や園七八百義。女房おぐちと浦ゑ
三吉ゑ玉代ちゑ。一す徒三郎ゑ音八。乃ゑ〜や清七栄三郎。月春市村座八 正月十三日
 三国一縞西 かぐ清女房おこそ淀川踏考。富士ひをあ世のと文治郎娘おくろと三役。
祐つみと平月ゑ。富士下ろ丹ゑ実ゑ浅間ちゑ三役者郎。稜父のちげ安と八ちゑの
三郎実ゑ清ゑ要人ゑ作三郎。近江の小夜ちゑ武ちゑ。月さよと。大磯のとらゑ路三助。
そぐの十郎祐成源三助 付祐成初名 ゑ郎付宗尾上紋三郎。小林の郎ひるとかげ清一子

あぎた九郎十郎。鬼王新たろと塊や左衛門治嵐三八。ぐぐつの平左衛門冠十郎。こうらの
元貝濱次郎。若葉林平と嵐新平。橋本平兵衛と富士川國義。くるくる荒五郎狂里
富本連中あてお勢。まつぢやの家中。げの甚市川海川路三郎。松浦西海川路
路考。かぐぢとや千代は次郎源三助。てこ人巫河東節松の内の浄るりあり。後と
宗十郎三回忌の追善。ふぢや伊右衛門と源三助勢。たぐぢ。三月廿五日より
天満宮種御供　菅原相道実白玉娘おり。芝寿三役路考。荒茂左と附平ふ
幸四郎。浪師源義と宿称左郎伊之郎。小橋と路三助。巳人浄瑠理松梅色結綿
富本連中ひろ相勢。判官代照國源之助。白玉娘雷助。奴池平と新平。巻三民
七義。清水廣ざみ國義。平のまれと國ふ。左郎女房松ぐえ路三郎。三孫
げんぢ冠十郎。土師兵衛三八。清つらと武左ゑ。舎人巻九郎十郎。ほまの浮判

と。二ゑ目　泥絵忠義譚里　里見の家中西木戸三郎と幸四郎。門家来伊五助ふ
伊之平。げいやおたつ路三郎。井筒屋傳三清と源。乃白玉万八と坂東寿次。
猿回し。ふ次郎と三八。娘おきね路考。門ゑ月十九日より　忠臣講澤　路考病気ゑ附
皆相体。こ夏芝居。路考。所作。矢間十左郎。ゑ平と三役幸四郎勢。由良ふと。
近江屋次郎左ゑ門と伊之郎。九左ゑ門と武左ゑ。門女房おれと。おりえと路三郎。おりと。
平右衛門女房おきくと路之助。ぢんや判官と羅三助。万蔵徒左ゑ三役源三助伊義
ふ義七國十郎。力弥ふ紋三郎。定九郎ふ國義。堀部ふ源次三郎ふ冠十郎。天川屋義平と
矢間左門。平右ゑ門三役。二ゑ目狂言　新艘本朝丸　ぢ付九郎三清。幸四ふ。春彩
綱ゑ郎と伊之郎。ふ屋の娘小糸とげのせん。花咲ふ路三助。ゑ次郎。依七ふ武左衛門。
ま代平八ふ源ゑ郎。桐生の次左ゑふ國義。新次三助と新平。八ふ七義。門ゑ平義ふ

いき。左九郎に万菊。長士郎に吾次。切り幸四郎。伊三郎。大勢格の上より成合。此狂言先年六代目三升夏狂言にて通。仍て大ぜい評判よし。門玄河原崎座二月朔日より初紋日楊梅曽我　五郎左衛門祐経市川白猿。二番悪七兵衛景清　同玄関菊の大坂へ出て。男女菊出勤して。鬼王と梶原平次。五郎附家三級なり。三らの片貝とけちの坂のおれる久米三郎。十郎祐成三津五郎。朝比奈弟徒次。浦片貝操車吉妻関左衛門。四人平作大ぜい。井場の十郎子門三郎。そぶの関三郎より門菊子けつ郎。桑方郷の弟小四郎と景清女房あこやの。小佐川常世。そぶの二の宮月七郎。大磯虎成京仮名。梶原三郎。比企の判官弟小郎。伊豆の次郎弟荒蒔。八ツ橋乃三郎。八十助。近江の小菊左衛友菊。五之目対面祐経白猿。そ鳥帽子。絶のしめ。生の中みね。柱をそ。心とのふ字ふ錠をあり。左衛門祐成三津五郎。飾物。左右ふ綱を引。

花やかなれども長う。袖なし羽織形かしりゐて。猿の面を指上の方よ居る。男女共ゝ
附家ゐて同じ形。春駒をもちて白猿の右の方ゐ居る。例の唱歌ゐて せり出ちゃんと
きゝすると徒次朝ひゐゐて。其外近江八幡を比ゞめ中通り美大名ゐ屋敷を巻上る
と流の頼家ゐ坂田富吉ゐ。伊豆も花ゐ行ふ。今代と共紋附面のみ長う花ゐ
ちゐう似合りのなきゐゐろ付ゐ白ちんの人形まことゐ一らう別者ども
いひろぎーと大ひゐうぐん大ゐうなり

○此附白猿立烏帽子へ大きゝ手拭ゐ丸き穴を五ッ六ッぐろり明て冠ゝ伊政と
同ゐ様ゐ私事老年に及びのぐ世ゝを故よ斯のぬくと云ゐゐ。非蓋ゐ大
見物の目ゐもからば。又天鵞絨襟の羽織も穴ゐ。上ゐ縞模様ゐ桟留をりつて
洗る。足ゐいぐと人ぐ。近年流羅ゐゐゐ兼ゐ。ゐ解もゐ行ゐ。
黒木綿まて洗ーと云々ゐ。又拭ゐの衣裳ゐ桃色の絞夜ゐ袖と腰よ。白練ゐ

とぎ結て子拭ゐ肩を拭迄。尉ゐ斗目と云ゐ白麻ゐ袴と袖ゐ手ゐ長ゐる
ゐう長ゐ縫つけ。人形仕立なりしが。近代は素襖の拭ゐと見物の評判ゐりしゐり上を
恐れ質素ゐ成ゐる。白猿の左ゐ結しむゐ拳てかぞへゐ。今ゐまでゐ
いゐゐと者ゐ方んゐ。一弥拭ゐ拭ゐかぎゐ。生役ゐ寄り。官位高級の役。
勇士大将ゐ成とも。狂言ゐ其ゐを用ゐ見物ゐもそれと云ゐゐ。今ゐ
非人の役ゐ甚きゐる仕形ゐ仕立ゐ。肩ゐ糊紙として真の血のごゐ。物
も胸をゐるくゐ拭ゐゐ。根ゐ狂言なれば甚役の公得ゐ。さゐゐ
狂言の大詰ゐ白猿景清の牢破りを勤る。親園十郎 四代目 木場ゐ 初代目 [illegible]
の附け形ゐ。白猿日松親木場の別荘ゐ。秀鶴中車と毎月絶行演と名
付け伊の役付ゐ初ゐ出ゐ。我ゐ仁ゐの名を比ゐ。未熟者故

を席へ出ざりしが。源清だに親みあるゝ。平家世を去りて廿四年の間
あへ手思も。熊谷も。梶原。山籠いまに及ぶと。皆く平家に随ひ者なれば。
頼朝平家を西海に亡ぼし。今鎌倉の源家の右幕下と仰がれ。平家に各有
りの恩に随ふ。其中ゆゑ清一人平家の仇を報ゆんとき。ゆゑ姿を変じ。移る
を聞ふ狂言なれば。一座の役者に成る源氏ぞ。狂言のゆゑんとおりふ気持
なるゆゑ。形ぐ。此ゆゑかんじんと教られしが。下手の名代なれば。私仕合ゆも
世人業の教えを勢より。五十六戈まで座敷を勤し因。ゆゑの清にさじく
彼しのぶ。軍彼の清に親父追善の長一度いとしまれまゝ。付度に滅ぶ
新参の仕納と成るゆゑ勤ると語りぶ宜なるゆゑまより折くかげ清
ありとゆゑども。さしる評判もなれば其人をよとて参らべし。

同じ三日。正面に九尺の牢がゝを上ゆ大石大木をのせてあり。無アんぞうの紋付き
ふ幕を張。まゝろに二面の山幕。日長屋彼風呂まで山ゆて。梶原を初中あり
義ひ付の太戦ゆて幕内。清清牢ゆて五十日の間食を喰ざるとふ事せり吸
ゆて南の桟敷下より。和田左馬岩永左馬ふ義左より男女義手名ゆく牢。
清清を責道ゆの所とて呼出せば。左馬ゆゑ目を注ちしゆゑ。
腰縄を付。久米三郎ゆ人九姫ゆ坂東義軍義を九十郎ゆ和田の次郎ゆ人
付て出る。此所にゆより対記浄るりゆて。事世。久米ゆ郎ゆれ有て。
清清ゆ出せ。清させんとふ軍兵ども捨手の五器完成ふくゝと。大ざ川ま
浄るりゆて白猿百日の事れかたら。小ゆ腰掛新義ゆゑ陣羽織の袖ゆ下に
負て上ゆ出ゆ将棋の駒龍王と縫て切法け。大縄ゆく巻れ部を出と。

久米三郎と呼び入れ。左世ゑくれねうくと。思入さあぐ。白猿ゑくゝ孫ふじや阿吉や人丸。右幕下にぐん来るとまでぶ。重ゑるるもけふまじと思ひ。優曇華のたのめん星ぞ。寔に観音さんさの切刀。おりがらや。秀やさうさり形ぶら人丸。あこや。

一そのお都さんおがまれね。あこやうの苦しさを雅樂。

一おさうのひ附ふも別まりてえおぐうね父のおうな。母さんのお新まで。えくふかひるえ此お姿。さぞ口惜念で。入り来うのふ。トとゝ人なく。

一夫より重清を大縄のまく軍兵引出と。岩永三方よりの世る鮑の見ゆて食と。近あよこ人丸よ涙ヒトうれひあり。重清えて。白猿一皆あうふじれど冠よなふぶ。鮑見て。

一吟ふすのハ犬か猫より外よ。ヒトいふ。重忠又結婚する腊ゝて食ふ。

白猿一俵人ゆメ伯夷叔齊ゝ。湯山ようふひを食ふて。周の粟と食ふとやう。孫家の孫ふ平ヒ。五十日があひぐ。普門丙の切力ゆまうて命をたすぐ。うねらがやうる孫氏へついうり。平家へ付うりひぐ。内膳侍ハ。烏の巣ゆすを食ふ雀も。奥ゆ大鵬の公がきれるのの。悪七三清うげ清ハ平家の仇を報ふうぐ。ぐうねふ孫氏へ。沼ハ皇の下を平なし。居弟ん。ぐ侍めふ伯平家の恩ゝなふぶやわふふぐ。ぐ引くうべて。二君よ。ゝくね重清を味方ふ。ゝくうんぐゝ。稼ゝい此ぐ。数うきい餓鬼めら。食ふてよくゝ星を食べ。ト膳をけとぐ時。一ゝうんと。ヤ右度。それでも。ゝくね。

一稲岩永が不間をお同ゆかけうう。長谷八郎保童丸を引ふう。

そや。

一図ゝ。ゝ保ゝ。ト保童丸を引出る。

一和田　一ヤア保童さまよおいさまーやく。

一そのうゝ。ぴめ。牢の内へうゝ。紀ぴをめされい。

一関ゝ　一さアがきめうせう。

一それを。一和どうというぐうゝ。ト久米三郎。牢の中へ入る。白猿ゝうん。大ぜいどうこいと。縄を引ぱるぐうと。引きさとえらまる。

つま世あらんとする
證拠とらんとかまへる 一和「なんとかげ清さんよ。そりやア曽我中村へあづけて置ておのれ
まる人名作を取て出されと存ぐさはやく首を折く。ありくだしてます。物をくゝらぬね上
からぬ味方にもはやくまいき青山のびはの有延青葉の笛の行がた。僉議さくさ
ねやアならぬね。其有延がござ 一白「さらばなりへ頼朝殿が善根をするなんどゝ
人皇の紀つらて。平家の追福大法事に管弦をそうし音律を揃へんとあるは青葉の
笛と青山のびはを加へるなとく云て。平家の調器を源氏の宝になさんといふ下心
ござるの謀追善といふ千僧万僧の供養百律呂の管弦より。清大将だ
ならば首をはねるが大法なり。ありかをあかされぬとてやふなりのうえより青くもない
知らぬかふ白状なる筋がなん。保童丸を牢獄へおしこめて。おとなげないけちな
根性の侍ぞな 一男女「岩永どのとうりが是でもまあならぬそうで御座る 一留「なるほど

これかゝ又甚兵衛のおだし召かる 一男「重忠がおん前お目にかゝりつゝ。どうぞや。ト わかまゝり
かげ清が縄をといてつちの上にかくかく丸入あつて。家来へ小つるを大きく丸をかく。その中へかげきよを入れる 一伯「こりやア重忠どのかげきよが
縄なぞなぜ解かせまれさ 一和「地の上へまるい輪を書て其中へ景清をいれさんせ。
一男「これも又周の文王の政道にて。いかなる五刑の罪人なりとも。地の面へ書たるを
囲ひて。其中へ入置てさへあれば。是れ聖人の牢獄。仁義の牢や。それによつて景清へ
重忠がす志の仁心。頼朝公へ御ぜん参上入やさん。なんと嬉しう御座ろ 一白「こゝ有がたし
重忠のさえん仁さわどふ厚き志ある故。牢獄重くとても破られぬ。只下目頼朝
公の御恩を汚しまするのならぬが。生前の大恩。重忠どのゝ恩ひ忍んでおります
一男「いかにも仁田どのゝ申付さ此を是へ 一仁田十郎「畏つて御座る ト あだしひきられおりて出る 男女器おきて捕つけく
一男「これ見られよ景清。松が枝にかけられ八頼朝公のあだしなされ 一白「十二頼朝

なのそばへ　ゆかれとや　一男　いろはも付よろこの軽名　一白　ゆくヒや右幕下
けしきの新浄るこそら住るぞや　さるぐらあの軽名ゑそれ世軍ハ破ふれね。
一男　ちろふぶ付の面目ハそがれつくん　ぎとの者うを　作くれておつアあれまいう。
一白　情ある　辛ハ　一言　さりるぐら　存せねと　作よ　俗色　いつまでも　なぜねて
一男　ハテ　ア　一和　それでもまるふねそふで　ムル　一男　いろさ　足でもまるふね　生産
の子　ゆるいまぐ　ムルうま　一和　ムルともぐ　ぐふてあまはるでやとまい　人九こい
ト　久米三郎　ひハうとく　我ぐちつでみつぐこいつと　責るぐ　早まりぐ　アア　笛のありうをねうと
まいう　一条　ぐふてとこ　ぐちりあんせうけ　土の坂よ　育つと　私ー　ちらうあうハムん
せねハハナ　一和　ちふねとねうーやアかしていつせる　ねうとまいう　ト　十年　久米三郎
一アー　ちうさんやくー　トの府白猿わを　出んと　さるおりひ入れあり　一宰　をぶるうく　ト白猿　白ばき　出ふれなはれ

ぶ　ハ　ぶ　和田ちうぐ　ま　ゆうく　さぐりより　ちとぐつく　一市　これまちうまうと　ちんせ　どうして
あの子ぐ　ちうふぐいの　一和　そんなふ　我ぐ　ちつてあるう　一左　さあそれいる
一和　我ぐいうとゆやアあつぐりこいつを　一市　アヤ　笛のありうをまうし　ちりふ
一白　こアやくたうけあ娘のひとりや二人　おろ殺ことていつまいと　拵さるを
いふ扨う　宗清ぐ　女房わぐゆもるい　ちこ　ちるこけ　老あぐ　一常　アイくと　帰く。
一白　ねうとうるねぐ　ちを根生でい　仏えるい　大切ぐ　紀世音を　祈ーぐるんとして。
一左　あつぐり　家よこれく。ト　情より　生と　一白　伝仏せね　ぐうら　ア人ぐとも　眼まぐ　泣
つぐこと　其拵ぐゆんよ　ちとて　ちこ　ちれね。　ちちく　流せ　一左　アイくトさぐりうんく
一白　南無　清ぐの　紀世音ぼさつ。ト　情ー　ちて　めつさるるを　ねうとまいぐ。
一左　ちるる拵く　ちつといふさいわの子の　ムぐんを　助こさ　ちつねことぐ　ぐふーく

ゑてゝおじやぞいなア　一和　そんなら是でも云るいうトゞろ　一あく　ムどひつこいなア
ト泣をとゝと　一和　扨くちぶといあつらだなア　一男　どうそまでもすみねば
そうぞ仏ル　一和　そんとこるりたてこあつくぶ　一男　然くぶ代ってけうまつろう。
ヤ有こ正これへ　一付　ハツトこて人琴三せんを　一男　ゑんとかけ清。平琴ハ此なで仏らふる　一白　いうゆもそれじが先妻さろ田の茶ぐひさうれ和琴。むさあ
人九へゆづぐた正うるとて朝霧の和琴うと名号紀念の正。仏として半度
の法ゆ入ヤた。　一男　イヤ故ゆて扇色戸手次ぐまつり清ゑ。ちん日の責
たゝく　一花　扨ゆどうこへ祇さんーたゞ荒田の茶のひさうの琴。和琴ときくも
なろけしい。人九どの孝の母江のかさみぐやこいのう。　一条　さこゝも孝のかさんの
お紀念でゆんさいゆ。おろこにやく　一男　りうこ」の伯牙と云ー賢人が導ぞる

琴を錦子期といふ者よく聞く琴うたんと思その音律を考る故なり。今此
琴三法をもとゆ人九よ知うせ。笛のあり琵琶のあり琵琶はあり白状せぞ某ぐ
存つたよ。又ゆこゆ文句を替て白状せぞこゆ。甚声をきいてそ室のみ正を
悟る　一花　ゑゝゆとおぼうゆて三味せんのいと恥ゝ〜に接ゆうおとひも者ゝね
かゝゆくの掉　一条　いふこと瓜も父上さゆ食るをゆぐうてゆさんせ　一花　そだで
紫ぐうこしらが　一あく　仏ちさゆうてゆさんせいなア　一男　附刑がのびるゆ人ひうねう
一和　二正のゆりうをねうせ　一　さゆくうんとぐ。トこれうゆ世三味せん久米ぐ
長唄　腕用　「翠性紅国ゆ物ゆ心ゆ所の国別ゆ姫ゆ其性ゆ」ト　とゆうこの合
白ゆん男ゆ彩これをきゆうこ　うこゆうなゆと
一白　ハテゆやーや今ゆ人が導ぞる弟ゆ音につこ。ゑうくぜんる一ッ氣ゆそれ。

市川白猿

空中にたなびき渡る。五色まじく黄色にして。かたちは清波のごとく。川となり
この容をあらはせ　一男　まさしく二ッの竹影に似て。これも又地中へ放て埋りし
形あり。音につれ気にかんじて。同気を露しるそのありさま　一白　ふえ竹の其切口に
正しく琵琶は水底に沈んだると見えたり。　一男　笛は正しく地中に埋れ隠れてありしと
おぼえたり　一白　律ならぬくちも失せぬ　一男　誠にめでたや。京清はまつたくふしぎに違
いし　一白　琴の音に連れ奇瑞をあらはせ　一男　笛と琵琶との同気の感通
一白　おりんで　一男　思へば　一白　ハテ　一男　おもしろい　一白　ふえ竹の　一友人　奇瑞じやよなア
「どうぞ御宝さんもいまやこの縁をうけまするやうに」ト　もてあそばるる琴　三味せん弾のけ
一和　ヤア主人のお悦り越なせんぎそうまぬるし。いやでもおうでもおませねばやア
おふるい。足りない方が金蔵の奥方の手をひくせふくは。人丸うせろ　ト又引立ようと　あはてさわぐ

一条　これや何とさんを　一和　これをよろしく京清が家の宝。宝瑞丸のつるぎ
ト刀の身ばかり抜きかけ　抜に仕込みし一振。これの家にある所を此方に奪ひおく。又
これも此が家に伝る人丸の像を目貫に入たる人丸の柄。此はあざ丸の
剣をまうとのことぐ。ト柄へあざ丸と彫め目ぬきぬさし　見てる足で人丸めを芋ざしぶ　一左　ミ三六
ミアト　かへるを幹彩にある本田将　一左平　それは又あまりきびしい詮議。ト　此提灯　友人あり
心ならず足をそそ　何とする　一　おまへまでどうると見さねぞ　一左平　イヤと申する　一何者　何を　ト　つめあふ
一和　仁田殿とびのそもお為母也。サア人丸をおろ殺せろ何とぞ　一左　さあそれは
一和　二ふのめりうていひ。窮殺みへお味方まうすろ。京清逆臣めはなんとぞ
一左　これまア待て　一和　イヤサ味方にほしくろ　一左　でもそれでは　一和　サアく
一ミあし　あんとごせい　一条左　ハア引トなく　一和　めんどうなまつとのゆく。ト　ふり上る　ろくろを

白猿ゆとくくりぎとり和田左衛門をあげつけて久米こくをひきよせる　一和　まて高清人丸とさくくを　一白　ゆとするのゞ
妻子の綱をみわざされ久米をまねゝ源氏の丸つくふるをさげたるのゝ。
はさくまぐるひのけぐきる。親ぐるまふかけ殺をとゝろ。娘かゞゝ　一常　トにゝん
ゝ世さぐりより　一白　それまアまてやまんせい高清後あんまりてくんどうのゝく。
そのまゝまぐを　一　トるく　一白　ほん家のやくくの名も人丸あぐ丸とつけゝも。氏二ツの名ゝうゝ
しふ親のまふけ殺をとゝ。宿世いるる因果ぞや。自業自得果は罪滅
せう滅。南無ゝ阿弥陀佛　一左　とれまア待てやさんせいのふ。ト久米こくを
ちぐあ　子情ない義ぢゝもよいかゞんぐくんをゝるゝ。伯と此子ふ殺されう
一白　ヤアこれゝんな女めざしたけて殺せとゝをいるぐたゝ。源氏の武士の剛りを
あくふねたゝけりのをとのけをなせくく。トうるぐ声　一常　とれいのふ。

ちん実の娘ゝふぐ伯ゝふ留書ふぐゝのふ。突つけて殺ゝもせうぐ義理のあるまゝしい
伯子ふゝふゝゝゝ目ゞ子ゝくくねとゝふぐ。まぐゝく娘の殺されるをなんと止ぎまねれ
ませうぐいるアト帰ゝ。はゝゝゝ伯子の寿の母。義田のあるくまゝまで云ぐ
ありゝゝいる。ちんふ又義田のまくゝ琴ゝゆも魂あるゝふぐ。伯ふぐなん求を
故ゝんせねゝ。ねをいゝゝも目ゞゝくいでは惜い。人丸が親ゞゝ。親ゝせてゝぐ
目をあゝして下さりはせ。親音さゝもきこくまゝ世ね。人丸のつゝとゝなゝゝ年ぞ。
ゝのぐと涙ゝゝしの浦ゝくぐ　久米　これゝト久米こゝ帰り入　一常　ゝれゝもこゝ母よ
人丸のつゝ　一白　ゝんと　一左　人丸ゝくまアは　トゝくをだましてりぎくゝ　一和　ゝんぐゝゝ
まアゝねを　ト常　世ふきりつゝる。ゝまゝりかくく琴ゝて老ゝとゝけゝあるゝゝゝくふたゝり
白ちんが懐中よりひゝりさをゝ。ゝゝくく思入つゝ世これゝてゝんとゝゝゝる。和田ゝ
ちぐくウトゝゝゝゝる。ゝゝくく見ゝとゝゝゝゝよびいゝる。　一左　ヤア高清どの。ゝゝゝゝ
あくゝちぐふ西まつきゝゝゝてゝゝゝ世久米ゝふをゝゝく

むまれは人丸が　一条　あさまへ穴も目がつんぐるく　一左　瀬ふのふ　一条　さくられな
わのぐと讃めらしの浦なふが　一左　我ゐもつんせまよ人丸のつゞとなげきし仏の詠。
一白　家の主宝人丸柄の妙をわふし　一左　琴の主のぶん合弾して　一白　さうま
うけ清が守本尊の念んぜ音力を合せあひし為ゐ　一左　人丸げりも人丸も
るべるらいなる主清どの　一白　めこや人丸伝ゐなせ　一之人　ありがたやなア　トいふしおがむ
よろこぶ　一和　ヤアめんどうなみちくめちくち長谷八郎がつきぎつて来まく　ト図書之人　一ぐつてんざ
トつまえ者ふと立まりあつて老世をとつてわさへる。白者ん図書之人をとつてなげる又ろろをひろとふ人ろでをぐろと引ぬきこれを喰ふこるく　ヤアとおどろく
一図書之人　ヲいらんく。だいじの手をひんねられて足が立ずうじんの手もなく死ねとする
此ろけざるア　ト白猿つかむと目玉とびでる　一和　まて主清源氏の禄をくらわねとぬかしたが。
源氏の武士のちくむふをなぜ喰わさせい　一新義　源氏の武士の肉をくんが源氏へ

味さつ　一白　イヽやさとらつは源氏の領の武士でなかい某が永代の正伝の肉。上総
の長谷で生れたるを与人間からしらくさせんぞ。今源氏へつつきけのそくをひろぐ
せんとらつが肉は主清が傾城の衣むふ。足をくらひ源氏の禄をうけなんぞ。
五十日が間の断食復肉ふ力がたじく。あつと無念もとてんさが。是でようやど力が
つゐぞ　一三蔵　イヤア　トおどろく　一白　まづ目前の敵右幕下頼朝公へつん忘せんそ主子
ト立つく松よりおちる者を引ちぎり　一白　晋の予譲がためしにならつて此衣を一ゑさく主衣
今日の形衣心おぼしめしきりまく。トぎんくと切さく　一和　ヤアかけ清なぜ牢を
破らせい　一白　りふ破つても大きなれは牢患が仁心にて仍く此着用せる人切裂
かげ清。此牢はおろかなる足かいちらの牢もつのでよせぶるうざい餓鬼から
見物ひろげ　一和　めんどう手討てされ　ト軍兵大ぜいとりまき　一三蔵　せふぬへ　トかかるとてなげ　白猿見へ

一白 ヤアぎやうくしき鼠の輩。星落くるりと見えども。月の光りに勝ことはなし。七兵衛景清が腕の力をおぼえたか。ぞ物ごんせんといふまゝに

ト是より大だてと入の鳴りものになり荒子の大木大石を投つけ。ほど牢の格子をくまどりけ。あアやくくとおし。打かゝつて保童丸をとり手し。ほ稀世人つきま皆々くわくをとつてなげ角柱をさしあげ茨道人追てゆき見えなくなり。すぐさ本舞台へおし返し。大勢はこ手をとつてどうところと見えなくなる。重忠出る。

一男 いかに景清汝項羽が山をぬくんぎの勢ひありとも万卒を以て討とらん羅網裏の魚をとるより安けれども忠臣を感じ是まで命を助くるとつる君乃寛仁ぞかし。又保童丸を汝に預ける間それを功に立て大軍をそんく向ふべし 一白 いかにや及ばぬまでの見参にやは汝大将の首を加し首汝が首もひろふぞ 一男 おゝかく戦場にて再会せん。景清が首汝が首ぞ。

一白 赤白二ツの衢はつき立て 一男 七兵衛かげ清 一白 庄司重忠 一かくぐ

一胎 きつぶで。ト いづれも見えよく 白旗これ 一足より二だん目始り ト 幕引

同じ月ゟ 郭公相宿話

鳴川大膳と唐木政右衛門男女殺。伊達木の奥から真柴と弓張の政右衛門なむきとあらそひてと五汁おいちの久米之助。実右衛門の友平とげくや十兵衛の三代大事なると中地獄の九兵衛の友蔵。和田靫負門之助政右衛門妻おくにに民之助娘貝兵へかの小侍川七兵衛。荒巻作兵衛門兵衛沢井城五郎が悪握川伝右衛門。石富武助二役くの徳次郎櫻井林左衛門は和田志づま医者今坂守江肝役政右衛門殺害半園之進。和田志づま妻と松本ら三年は荒れ次郎お絵坂東大吉娘貝実右衛門と沢井政右衛門は坂東八十助と此きやうだん伊賀鍬と御亭主の敵討を一ツに作りなる語同大評判役者も大でむ二くんか敵人岩井半四郎之同居逆岩井粂三郎

相伝とある。結俊鹿子道成寺　浄瑠璃　道行面影車　竹本錦太夫　三絃野澤喜吉。
濱沢の渓師雛六。実は尾形ゝ男女義。二役　今劇坊　大友舎人之助　威徳坊
三浦ゝ雛六妹おまづ久年ゝ。海老名の源八照勝　市川白猿。仮名太平記。
○此月白猿楼なく。男女義ゆ衣装を借りてはたらきしが。五六日出ずあとは
八十助勤む。是白猿まことの仕組めり。徳譽道本廣壽信士　享和二年戌五月十日　三代目大谷廣次
同夏狂言　夏祭　夏見屋長仲と徳三郎女房おつる実は松の二役と。
平代伝八ゆ徳次郎賀右ゑと。俗平次よ義右ゑ。園七女房おつぎ小佐川十郎。
俗ゑ恵と一寸徳三郎ゆ嘉ゑ。園七九ゝ三郎ゆ男女義。仮名も大で紀門秋車村座
伊賀越　沢井股ゝ平と母ゆ見松助。けの世ん新蔵　市代ゝ平。泥棒孫八鬼次。
奴行平　諸十郎。芳井今ゝ清ゆ鉄ゝ義。ゆ尾上伊ゝ平。和田志妻
柴ゝ。敷員ゆ巳ゝ平十ゝ。横井林右ゑ。三日八岳尾と。お谷二役　長ゝ城五ゝ
と改右ゑ。八百長。丹右ゑと石富武助　桂田内記二役　長ゝ平。仮名も伊勢
さし門秋市村座　椿歌舞白浪　濱名左園次ゆ六。奴弁平ゆ園十ゝ平。見寿院ゆ
冠十郎。ゆ安倍ゆ国義。かどうゑ六義。奴ゆ弁平ゆ新平。百性右ゑ平ゆ
源ゝ助。小雛姫浦ゝゆ。蘭の方浦ゝ平。順礼次平。飛ゝ武右ゑ。近義内義ゆ
伊ゝ平。阿波の十ゝ平ゝ清四代目幸四郎ゝ。歳六月廿七日男女川京十郎。
旋譽錦紅郷山信士。是ゝ代目幸四郎ゝ。同二ゆ目濱川藤考。仮
上方へ実ゆ名ゝ残打言　信田書遺別　ゆ勢平ゝ八。伝田の在司冠十郎。ゝ
兼町雄次ゝ。門渡ゆ濱次ゝ。あ毛の童子ゝ国義。安名源ゝ次。やかん平ゆ
武右ゑ。芝ゑの道灌。ゆ姫と瓶酒。早船ゝ陸ゆ八ゝ。

五〜〜〜の字と書不ぬるう。評判近代の名人と大入大盛うこ。門秋沼弟湊庭
業績新規を出す。

源平常瀧

小ぢんまりの名人二郎。
国三蔵次ぐの考ぐ雷義。行青姫七義。葵門安右衛門。
滝尾の十郎と友義。義賢と荒五ぐ。実盛と男女義ぐ。二番目

九州稲荷東鑑

おまぬと酒妻おこめ。久米三ぐ。家ぐ家源平徳次刀石見門ぐ。代七七
荒の弟。お志乃伝三蔵と。鶴うの次ぐ作。男女義。伊豆の大ぐ。浄瑠璃
道行栄花門。常盤澤編ぐ。門吉代ぐ門。和哥ぐ。二後岸沢古式郎。
門式佐おぢ。顔見世中村座の

越後獅子

武田信虎。八ぐ八ぐ。坂津ぐ。
八十助。今弁慶三郎。時長三郎。実ぐ山本勘助。ぐ四郎。
女房かさね。富ぐ。七後姫路三郎。浄瑠璃鵜飼石瀬流妙ぐ。常盤伊勢ぐ。

連中ぐ。三法岸沢古式郎。門式佐おぢ。長坂左衛門。伊三郎。板垣勘解由。
武左ぐ。鬼児島弥七郎。大詰。ぐ四郎。川中島の八人あて。
二ぢんまり。闇の弁ぐ。ぐ四郎。きぬ川今五郎。三八。かさね亡魂。富ぐ。浄瑠璃
禍かさね。富本弁宮ぐ。三法ぐ。洞窟里夕。ぐれも大ぐ。大浄瑠。同市村座ぐ

富士見西行桜

ぐ仁祝王。杉ぐ。八幡ぐ。武家源ぐ。伊具の十郎。長衡ぐ。冠十郎。
ぐ。源の弥ぐ。友義。名月姫ぐ。踏ぐ助。秩父の十郎門ぐ。和田のぐ。鬼次。
鎌倉物語ぐ。富政ぐ。男女義。暫ぐ。四ぐ。色世夕。出島。富本連中。
勝。周防の国伝久米三郎。荒川ぐ。代ぐ。錦本ぐ。色の市。長唄。実ぐ。
勝田の原ぐ。八百義。ぐ。家源ぐ。ぐ。ぐ。琴。ぐ。
五人。此跡。二百九十七年の公羽。化成王松助。仙人。形。日本回国の巡行者

彩淵実ハ安部の宗任男女義。不貞の國妙ヨ八百義。だんまくとの幕あり。大浦ふ
厨川の次ふ家任ヨ夜義。貞任女房袖萩常世。かつふの中納言松女。実ハ安部の
貞任と。八百義又あふつと而はし。ゆとても大浮判たぐた。同河示番所。霜月廿一日ゑ

義経千本桜　源の義経とゆ。しのみの權太ふ荒五郎。鄭重添たつゆ友義。相模ゆくふ丹
叶助。入江の丹義ヨ浩十郎。岳義ふ赤たつ。典侍局とさーやの娘お里。静ゆ
三段中村大吉。河城左ゑ。渡海や浪平。とれ盛桜川の芳葩。佐藤忠信と。大和の国
添たつふ狐。梶木平義ヨ弟付。七段左ゑ郎大ぐた大浮判ゑ。

松春壽曽我　鬼王ふ三八。栗津七ふ紋ゑ。梶木平義ヨ弟付助五郎。源左ヨ奈奈
名次。芝甲九ゑ郎。国左ゑつ。箱根の別當大吉。工義太坊九国十ゑ。近江小義左
武義。八幡ヨ雷助。梶木ゆ奴げぢ平ヨ栗義。ろゆ我の十ゑ郎。祐成ゆ。ゑ藤ゆ郎。

享和三亥年　三ゑ中村座

松春壽曽我

享和三亥年番目　中村座

扇ぢくしの
せり姫

十郎祐成
坂東三津五郎

五郎時宗
尾上
栄三郎

曾我子新祐成　坂東三津五郎
同　五郎時宗　尾上栄三郎

對面

○あめぎばくしのせりふ

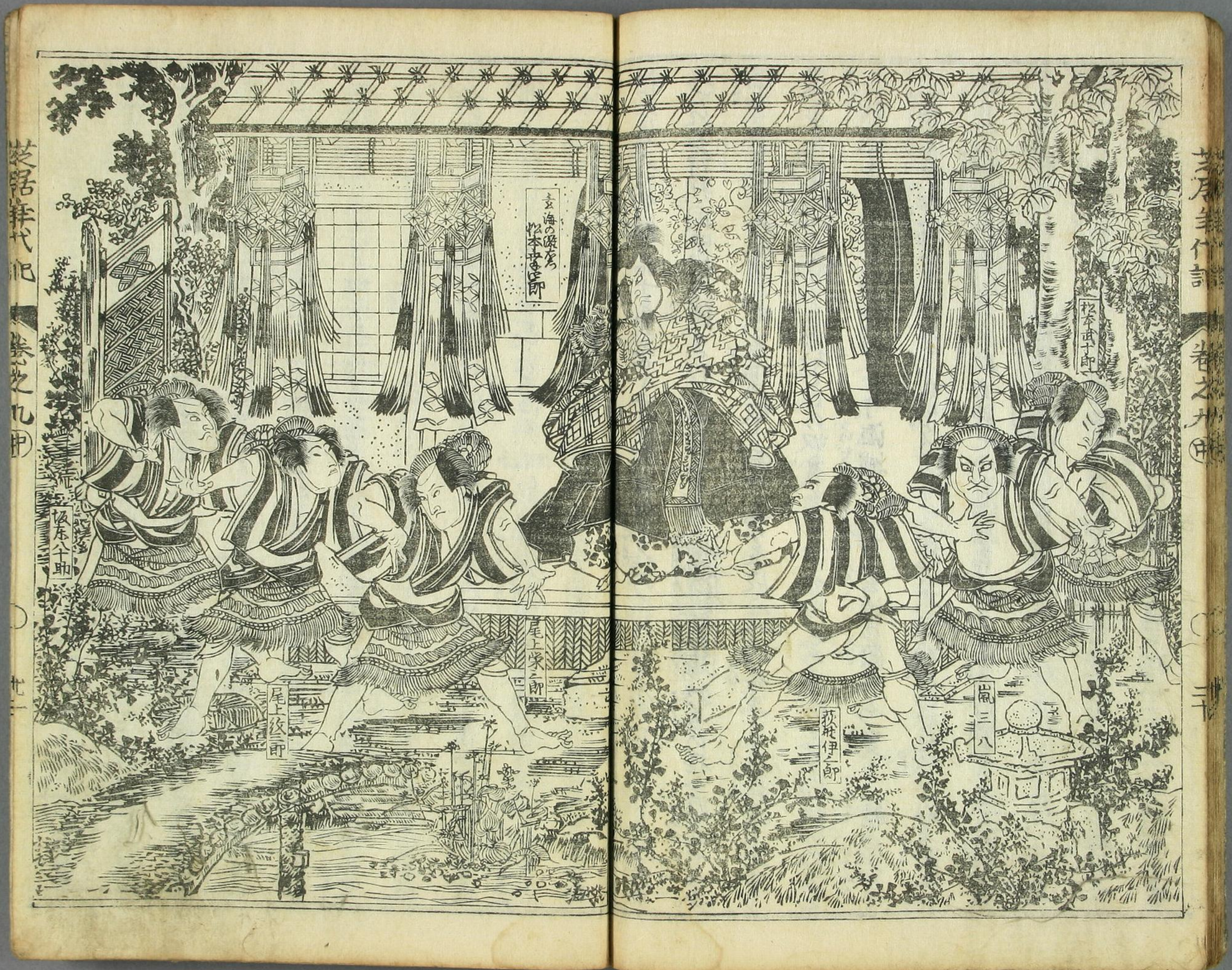
扇の京鄙こゝろ〳〵。才熟な我こゝろ。なせ絵ども。舞五州扇を作りまふと雀豹ぐ。古今注ゆゑ。まろさ涼風を採のあまきう周の武王の製作と。事物紀原ゆ羽うちわなり。日本めでたれ。あぎ。梅の加えぎ。愛るゆ。それ初音の京扇。殿中扇をえらこそ。ひらく中ゆも寄。簾扇。花のうち惟光。あぎよあふぎ。ちれる。アゆ。昌氏は新堂。いろ〳〵扇と日を握る。扇付扇の五本入。やうやうめとり。柏扇のふゆゆ。赤沢山の天地金極彩色の紅葉付。ちゆも椎の木三本入。木ちょとして射留らる。その紀骨ぐらく。あくるん宝朔を浴めぐ。折よく敵よあぎの的矢よりも早く

孔かゝて。コレ。デモ。ハテサテ。恨の定紋のかさゝ扇でめくふとも。今年骨ふ丁子。かんぎく要を打付の。桜扇のこと。想ひ。此場ハ墨絵のうけうぶし。まくれ。編笠捨てもきやらの。おくふぶ重く扇の富士。宝の。狩場ゑ住吉れ。田扇の皐月行。その。盆沢の陣扇。国のあぎふ忍び入。あ西この板ふ地紙まぐ。切〳〵切箔微塵箔。ゆまづそれまでゑ古劇の。まを祝。て。寿あぎ。万年扇。萬〳〵歳。寿そぐの。對面と。ゆふうやまりてはること。

円五ふ付宗栄三郎。五夜たふ拡経伊三ふ。川津の三郎拡安幽魂と。二ゆ。なり。図三郎と。氣頼幸四郎。大張のとら踊。三郎。けとの坂のおる富三郎。初代ちゆふ。三津ゆふ。栄三郎と。三人ゆ作。三重霞嬉敷顔鳥富本節文字太夫。三弦鳥羽金里夕。名見崎喜蝶。二番目義仲の息女綿の姫ゑ七郎。佐野の百姓与五ちゆふ三八。今かゝ切狂五市

小次郎日天清玄清実ハ赤の次郎八十助。豊竹叶太夫ニ新平とてや徒三郎ニ
栄三郎。行の下孫八左衛門ニ武左衛門船橋ニ左衛門実ハ石田三郎為久岩井半四郎。女房
おます川路三郎。けいせん八ッ橋ニ冨三郎。佐野次郎左衛門実ハ樋口次郎兵衛ニ狂言
替りて【伊達染仕形講釈】此狂言ハ廿二年以前桜田治助作ニて仲蔵團十郎不破名古屋
大当りし是ニおちよ半兵衛を元組。山名宗全と町ぶしや菊枝西庵ニ半兵衛母
三役嵐三八西庵家来團平実ハ渡辺民部逸友ニ八十助。山中鹿之助ニ紋三郎。
さらに三八秀鶴ニ團十郎。奉公人佐門之助ニ弐三郎。土子泥之助ニ新平。荒波灘藏
武左衛門荒獅子男之助ニ栄三郎。三浦屋けいせん高尾と。おちよ姉おかよ路三郎。
足利頼兼と。八百屋半兵衛ニ三津五郎。名古屋山三と三役也。細川勝元と。ゑさや
佐次兵衛女房ニ又平妹おちよと半兵衛女房おちよ冨三郎。男達浮世又平不破

伴左衛門。八百や娘おなか十郎三女ハ孝行郎。此外まで揃つくしのいろんのせりふあり。佐まで
大でき大評判。同中村座続き狂言卯月二日より【[illegible]】此度の狂女浮舟七三郎。
志摩のせんじ又平次と是の踊の奴と女らく男手に三八門。呑平と云ふ湊五郎二段く
栄三郎。木津川錦人と雀おどりの奴幾平ニ八十助。同志女平紋三郎。門奴丹平と
船頭ひがきの小平次二役仔三郎。海賊の法本玄海の浙右衛門実ハ三韓の将軍
呂高王李松錦岩井半四郎。雀おどりのたて花ニ大評判。けいせん瀬なすみ路之助。
時女小女郎ニ冨三郎。小松屋惣七ニ三津五郎。此きやうげん何も大でき同去
市村座正月八日より【曽我男徳曽我】赤の次郎すけとし。後さの三郎二役八百蔵。
祐つねと悪源明王の化像ニ男女蔵ニて。名主九時宗久米三郎。ちらりと授くる
瀬女の鬼王ニ友蔵。團三郎と十郎祐成ニ源之助。鬼王妃おくらニ市川男寅


芝居絵代記 巻之九 中
玄海の源左衛門 松本幸四郎
坂東八十助
尾上栄三郎
尾上政三郎
松本寿十郎
嵐三八
荻野伊三郎

五郎大坊丸中村久義。月さよ姫こと久。赤沢十内後家おさつ本世近江小藤太。
六浦道竜ゑ松助二役。こん間のたて評判よし。五之目對面新しきゆゑ新代ぞうり。
源三郎久義二役。せりふ多く仮名も大評判。二ぢんめ 江戸紫田舎源氏 桜屋久三郎
八百義。女房おまつ川ゑ常世。田川喜徳と門三郎娘おるり姫おとあ。げいや湯一まの
おうん二役久義二役。金時屋伝兵衛ゑ国義。手代伊八ゑ市山七郎。手代清九郎ゑ
芝義。小糸太郎ゑ冠十郎。桜屋丈義ゑ新代ぞう。妙法寺に滝夫。考るの若
吉次ゑ鬼次。けのせん涙の戸渡瀬ぐち。このせん松山ゑ路之助。桜や久ぶゑ源三郎
八谷五郎ゑ郎ゑ松助。中買ぼうんや伝三郎ゑ。安山嶽志賀郎ゑ二やく八百義。
藻ぐるの二平に男女義大ぐれ大評判 浄瑠璃 乱れ柳黒髪 富本豊前掌 日大和掌 目左掌
三弦 三絃寄番助 番相図里長相勤。久義三ぐ。路之助。源三郎。男女義。八百義五人面飛大ぐれ大高

同三ぐんめ四月十日より 野辺の書状 親字平郎ゑ同忌追善。紙や治郎ゑ源三郎
お勤。女房おまつと紀の国や小春。二役久義二役。ひとあおとゑ男寅。女おとゑ
源三郎。九郎新三郎ゑ鬼次。ぶ貫や若六ゑ伝ゑ。たいこ持豊八ゑ国三。浅吉
五九郎ゑ国義。江戸や太左ゑ冠十郎。ゑ左ゑ女房おまつ。幸門ゑ郎。ちゑんぐ三伝。清坊
芝義。でんちゑ郎ゑ男女義。彩色孫左ゑ八百義。 浄瑠璃 道行折会須磨 富本大和掌
三弦 各見崎徳次 番相図里長 源三郎。久義二ゑ。相勤る伝三郎ゑ大ぐれ大評判。同跡 かぐや山 岩蔵ゑ
松助。ちのえゑ多世。お初ゑ久義二役。お梅ゑぐ評判よし。同夏芝居 恋屋満秋 師匠と
由良之助。十太郎ゑ二役男女義。勘平縫之助。そうか買力源ゑ。ぶんや判官五役源ゑ。
桜田とおとゑ門三郎。乳貫と入間丑三郎冠十郎。石堂右馬ゑ元ゑ七義。斤山
源吾と若狭ゑ鬼次。斧九郎ゑ国義。同ひとあおとみと十ゑ。ぶまおとゑ。

万屋おまき二役。踊子。お石とけのせん。浮橋ふ雄次郎。二ぐんめ

五大力　母の三五郎

男おまき。さろま源五兵衛。源之。小方ま。踊子。げいこ。濱吉ふ七郎次。下男土手平

国義。家ら徳右ゑ。ま。源五郎。千浦ふ右ゑ。ふ七郎。黒猫八右衛門。ふ門。三郎。世話

狂言大ぜい大入。同河東藤屋国貞十日より

出世貞操橋　清水三門三郎清吉。下男

伊達助ふ荒次郎。稲毛のさくふけ。奴陸義ま。源十郎。奴土手平ま。友義。非人血筆の

仁ま。門義。ぜんぐりのきんぞう。ま。ゑ。ま。人丸姫ま。小住川七郎二ゑ。横姫羽ぐろ。

松ま。清ま。音八。さろ。ふ姫のかしぐ。宮木ま。中村大吉。清ま。の。清玄。律師。ま。ゑ。

赤がのとれ　紫やしと　おちくあまろせ　田手の初りの

姫松源氏

長唄　富士甲子義　三弦　杵屋和吉　国安喜ま良　大坂あれば異ま

白拍子橋ふ

坂東ま。ゑ。郎。

今剛坊ま。荒次郎。徳坊ま。友義。伊ま。ま。大ぜい大評判。後ま。中村大吉。あとやまく

ぜのこ曲あり。宮永左ゑ。ふ友義。秩父の重忠ま。ゑ。ふ。伊ま。も評判は。門次郎

姫小松　二度目に切二幕。後宮ま。ゑ。ふ。ゑ。郎。おまき。ふ大吉。同二ぐんめ

伊勢音頭恋寝刃　河師

福岡貢ふ義。ゑ。郎。同伯母おみ。ふ。と。古市。めぶくや。の女郎。ふ。ま。おみま。大吉。此狂ま十人切

評判は。門夏中村座。六月八日より

忠臣蔵　大星由良ま助。天川屋義平。寺岡平右ゑ。勘平。

加古川本蔵。宮ゑ。郎。浅谷判官七段。源ゑ。郎。大おろし。同秋七月廿七日より

菅原

伊賀越道中双六　沖師

竹平。大屋。坂東八十助。福丸と宿稲ま。ゑ。郎。ま。栄三ふ。くりから。ゑ。ふ。国十郎。ま。ま。藤

玄蕃ま。杉平。沖。臺。梅園。ぜんと。松王女房。ふ代。ま。路ま。ゑ。郎。菅。相座と。梅ま。丸。

武沢源義。二役。源ゑ。郎。戸浪と。八ま。ゑ。郎。田ま。役。富ま。ゑ。郎。判官代。照ゑ。と。松王

安宅関　四郎ゑ。二ぐんめま。故人錦紅一周忌追善

出世三三九郎　ぐんどの義ま。ゑ。郎。ふ。

ゑのせん。小紫。冨ま。ふ。白井官花魁。ま。侍ま。ふ。白井権八。ま。ま。本庄助ま。ま。ま。八。

奉庄助八ヶ八十助。奴又平に栄三郎。女房おとく成路三郎。伊豆も大でた大浮判人。
浄瑠璃天竺あふが二上の新八幡宮。ゆかりふが桂のひとり家。**雛流露轉寐**。富本欲三郎連中ゆく相勤。
同秋市村座。七月より百人一首狂言の姉人。**小町踊り**。一幕出と良安奉れ宗貞と沢村
源三助。小野小町と。小町踊の精二役。瀧川路三助。関寺の翁実は大友黒主ふ
男女義。浄瑠璃。**積恋雪関扉**。常盤座浄瑠璃代参。同長門屋。和歌三郎お勢。
伊豆も大でた。同八月七日より。**義経千本桜**。市川八百蔵一世一代。弁慶のひとあたり。
浪速海。浪平。源九郎狐。佐藤忠信二役お勢。河越太郎と。横川覚範。男女義。
弁慶。松本義。狐忠信。源三位。相模ふる。義。入江丹蔵。冠十郎。安徳天皇ふ
男寅。女房。静。路三位の君。義。とめの局。義。
二ぐん目。**桂川縁門見**。常盤長谷雅。八百義。弁慶。長谷雅助。男女義。庄屋業左ふと。
幸三郎。松本源次郎。求馬。喜代ふ。汁の宗兵衛。冠十郎。おとく母おりや。万作。
浪おとく。久米ふ。長ふ。女房おきね。常世浄瑠璃。**恵栄萩玉鉾**。富本大和三郎
連中。相勤。伊豆も大でた。大浮判。同九月長谷。**妹背山**。大判司清流。ふる
八百義。入鹿の大臣。男女義。ぎ。赤の浮橋。源ふ。ひとるふ。踊ふ。板橋やおみと
と。久我ふ。信ふ。久米ふ。媛室さだふ。母ふ。同九月十六日。坂東彦三郎。
中村大吉。大坂表へ出る。名残狂言。**同名残狂言**。浄瑠璃。富本欲三郎。同市丹三郎。
同里春三郎。三法。羽衣里。夕。同里長お勢。二傳の百姫。ちと世話。ひるう順礼
おもわん。石山観世音の三像。三役中村大吉。浮嶽恭ふ。俗ふ。奴なみ平ふ
市山七義。白川左平。虎文嵐冠十郎。孔雀弁慶。惟世。と。田舎順礼。
木綿苅の翁。山王の化。ちうの猿の化。牙坂東彦三郎。お勢。伊豆も

大浮船。同九月廿四日より 惣流義 由良之助義之。おかる浦之介。かほよごぜん万作力弥よ尾上伊之助。門岳後之介。師岳義。
九郎義よ冠十郎。かん平ふ源之介。若狭之介。右馬之丞。平ゑ。定九郎 役男女義。
ゑんや判官。平義。おかる母。天川屋義兵衛 役 中村庄ゑ
惣流義 長兵衛の妻 姫小松 後寛よ幸四郎。番五郎よ三蔵五郎。もやもとふ富之郎。
有王丸八十助。河原崎座へ秋狂言 花樽助発相撲 とふ名頭の辻看板で出せ。
沢ゆりそう延門ふ相撲。彩見世まで休みなり。

歌舞妓年代記巻之九 中 畢